

熊野の
本林から

怪野の熊

「本宮町の怪異(其の三)
一本ダタラ」



和歌山大学
システム工学科
システム学
環境システム
中島敦司教授



猪笹王という大猪が湯治に訪れた湯の峰温泉。約千八百年前に発見された日本最古の温泉だという。

本宮町の川湯には、大岩明神を祀神とするホコジマさんという小さな神社がある。昔、一人の男性がホコジマさんの付近を通った時、狼が裾をくわえて引っ張って岩陰に連れていく。オオカミのなすがままに隠れていたら、大きな一本ダタラが「人臭い、人臭い」と言いながら前を通り過ぎていった。その男性は、助けにくれた狼のお礼

として「自分が死んだら身体をくれてやる」と約束したところ、狼は代々墓に死体を取りにくるようになったという。この話が伝わるためか、本宮や十津川では一本ダタラをヒトクサイと呼ぶこともある。狼が一本ダタラから人を救ったという話は、以前も紹介した中辺路にも残されている。一本ダタラは那智勝浦の怪異のひとつだたるとして有名だが、本宮の山中にも出没したようだ。

また、本宮から熊野川をさかのぼった奈良県の伯母(おば)峰では、その昔、猪笹王という大猪がすんでいて、射場兵庫という鉄砲撃ちに倒された。猪笹王の亡霊は、本宮の湯の峰の温泉に野武士に化けて湯治に行ったそう。その様子が尋常ではなかったで、宿の主人が湯を覗くと部屋いっぱいの大猪が寝ていたという。その後、伯母峰に戻った猪笹王の亡霊は、一本足の鬼になって旅人を襲うようになり、丹誠上人が封じ込められた。ただし十二月二十日だけは封印が解け「果ての二十日」として怖れ



大台ヶ原に近い伯母(おば)峰には猪笹王を祭った猪笹王霊廟(れいびょう)がある。

られ、この日に山に行くような人はいないという。本宮と十津川の間にある果無(はてなし)の地名は、「果ての二十日に人は無し」から付いたという説もある。

江戸時代の紀伊続風土記に「十一月頃の山中で、雪の中に四、五歳ばかりの小児の足跡を見たことがある。また一寸五分くらいの円形の足跡を見たことがある。また六寸ばかりの十字をなした足跡があり、その間隔は三尺ばかり。一本足で歩いたと見え、左右の足踏みがなく一筋に跡がついていた」との記載がある。出没した山中の正確な場所は分からないが、大塔山の方だとみられ、だとすると川湯の上流ということになる。足跡が小さいことから、子どもの一本ダタラかも知れず、一本ダタラは子づくりをして家族や群れをなしていたということなのだろうか。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

